

厨子銘書からみた近世琉球の人口動態に関する予備的研究

宮城弘樹

Preliminary Research on Population Dynamics in Early Modern Ryukyu as Seen through the Inscriptions on Funerary Jars

MIYAGI, Hiroki

《論文要旨》

遺跡から出土した厨子に記載されている銘書を集成し、近世琉球の人口動態を紐解くことを目的とする予備的研究である。人口動態の一端である死亡クライシスを、厨子に記載される銘書を用いアプローチする。厨子を含めた葬墓制資料から、人口について迫るためには、どんな方法があつて、どのような課題点や問題点があるのかについて検討を行う。

具体的に用いる資料は、厨子に記載された死去年のわかる銘書610件で、資料数が安定している1730～1925年の間を対象に、その件数の時間的推移を示し、近代の銘書と近代統計の比較、近世の銘書と飢饉、災害などの死亡クライシスと考えられるイベントのあった年代との整合・不整合について考察する。

Abstract

This paper presents the preliminary steps of a research the aim of which is to approach the population dynamics of Early Modern Ryūkyū, and especially mortality crises, through the inscriptions found on funerary jars unearthed from archaeological sites. This paper will consider the possible methods, as well as their shortcomings and issues, that can be undertaken to address population studies through material related to funerary practices (essentially funerary jars).

The data includes 610 funerary jar inscriptions mentioning the year of death, spanning from 1730 to 1925, a period presenting an abundant corpus of inscriptions. Data was sorted in order to show a chronological evolution. The Modern Period funerary inscriptions were confronted with available Modern Period statistics, while the Early

Modern Period funerary inscriptions were examined to see if they were or were not in conformity with periods that are thought to have been mortality crisis events such as famine or natural disasters.

はじめに

考古資料からの人口推計は、かなりの推論や前提条件を踏まえ、かつ少ない資料を用いて行われることが多い。琉球列島における先史時代を含む長時間の人口推計として代表的なものに、友寄英一郎の人口推移に関する研究（友寄1971）と高宮広土による遺跡数の推移が知られている（高宮1997）。近年では山崎真治によって、農耕開始期以前の100年あたりの遺跡数の推移と近世以降の史料や近代以降の統計を用い通史的に行った考察が注目される（山崎2021：30）。

グスク時代（古琉球）に遡る人口推計については高良倉吉による文献史料で確認されるデータを遡及させたアプローチがある（高良2000）。人口ではないが、人文地理の観点から1集落の軒数を推定した研究も参考になる（高橋2003）。一般的にグスク時代は農耕社会への移行による食料の安定供給によって遺跡数が増加し人口増大すると理解されている（上原2003：265、ほか）。

先史時代や前近代の統計資料の無い時代の人口研究としては、同時代の遺跡や出土品から、①集落データ（遺跡数、集団規模、遺跡面積、屋内面積、遺跡存続期間、住居数）から人口の推定する方法、②季節ごとの動植物資源に代表される特定の環境の豊かさを推定し、収容力を推定する方法、③人口パラメータ（出生率、死亡率、人口構造、平均寿命、栄養不良や疾病）を推定するための人骨研究という方法が知られる（コリン・ほか2007）。

琉球列島における研究では、島という単純な環境から、遺跡数とその存続期間などを検討することで、島ごとの人口変動をモデル化することが可能と考えられるが、先史時代に関する人口研究は必ずしも多くない。

本研究は考古資料を用いた人口動態の一考察である。対象とする時代は歴史時代で、用いる資料は厨子記載の銘書とし、主として遺跡調査によって得られた出土文字資料を用いる。歴史時代の人口史料としては、幾つか存在するものの、問題点も指摘されている。具体的には均質なデータが間断なく存在しているわけではないということ。家譜史料は士族に限られているということ。女性や子どもの記載に遺漏が多いこと、などである。

本論は近世の古墓の発掘調査から得られた資料を用いて、歴史人口学研究に寄与できないか、その予備的研究を行う。

1. 先行研究

これまでに、沖縄では前近代の古墓調査が積極的に行われてきた。これは主に埋蔵文化財の記録保存調査として行われたものと、移転時の立ち合いとして地域史や民俗調査などによって行われたものがあり、データに一定の蓄積が見られる。

これらの古墓調査出土品の中には、厨子と呼ばれる蔵骨器がある。その厨子には銘書と呼ばれる記銘資料が存在している。いわば出土文字資料になるが、筆者は2020年度までに出土した銘書データを悉皆的に調査し、まとめた経緯がある（宮城編2021）。そこで、この集成資料を用いて、人口動態にアプローチできないかと考えた。既に同様の研究が江戸時代社会の墓石と過去帳で行われており（関根2018・ほか）、これらをヒントに取り組みものである。

厨子甕の個数を人口推移と比較した研究として安里進の「絵図と厨子からみた首里・那覇の人口増大と都市化をめぐる問題点」（安里2021）の研究がある（以下、安里論文）。本論に関わる先行研究として、以下に厨子を用いた人口推移の部分の概要を記す。

安里は、近世琉球の人口変動について、人口調査史料を用いて総人口は18世紀前半から減少に転じたが、首里・那覇では人口増大し続けたことを指摘した。その上で、これを絵図、厨子を用い首里・那覇の人口増大について確認する。

人口増大の後には死者が増大するとし、「これを納める厨子（蔵骨器）の増大となって現れるか？」という問いを立てる。安里が用いた資料は1997年と2006年までに安里自身が集成したボージャー厨子、マンガン掛け厨子の紀年銘を持つ厨子442個のうち1876年までの年代が記された106個の厨子を用い、1基1個として20年で区切って分析を行っている。また、出土地でみると首里・那

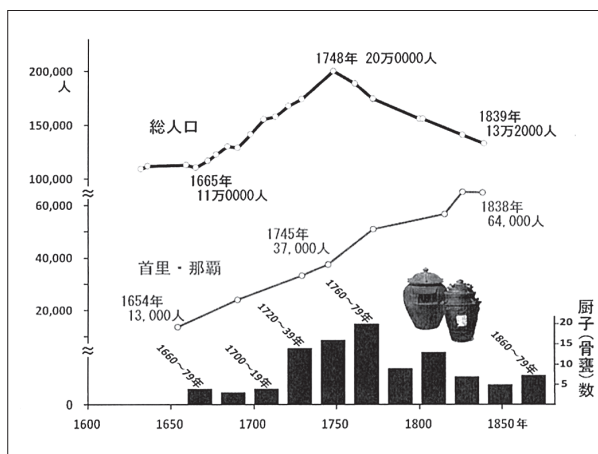


図1 首里・那覇の死者数の変化（安里2021）

覇とこれに隣接する真和志間切、浦添間切、小禄間切が約70%と主体となることから、これを首里・那覇の死者数の変動を反映すると仮定した（図1）。

厨子の数は総人口に対しておおむね40～50年のタイムラグで変動しており、40～50年後に死亡・洗骨されたと考えると妥当なタイムラグと結論付けている。安里論文の趣旨が首里・那覇の人口変動の問題を、近世の人口調査史料の比較資料として絵図と厨子を用いた研究で、厨子分析のみの研究ではない。検討は先駆的な仕事であるものの、安里自身も「今後厨子の年代デー

タを増やしたうえでの検証作業が必要」(安里2021:26) とするように資料数の少なさは否めない。

2. 対象資料と検討の方法

安里論文が対象とした資料は、本来であれば全ての厨子の個数とするべきであるが、これを紀年銘のあるボージャー厨子、マンガン掛け厨子のうち、1876年までを対象としていた (n=106)。そこには、3つの課題があることを指摘しておきたい。1つは甕形に限った分析となっていることである。厨子には甕形と御殿形および転用蔵骨器があって、一部の資料群を対象にしておき、本来であれば対象とするべき御殿形の資料が含まれていない。2点目に紀年銘には、主に死去年と洗骨年の二種があってこれの別を分けておらず、おおよその洗骨年と仮定して統計されている^{註1}。3点目として、20年で区切った分析となっており、やや時間間隔の幅が広がっている。その上で、人口推移と40~50年のタイムラグがあると結論付けている。そこで、本論では筆者集成の全紀年銘資料を対象として、以下のように分析を計画し、上記課題について若干の改善を試みる。

①全厨子(甕形、御殿形、転用蔵骨器)を対象とする。

②集成の銘記載厨子4,424基のうち、紀年銘資料2,637基を対象とし、標本数を増やした。ただしここで言う「年」は、年号が記載されて判読できたものとする。なお、干支のみ記載され年号が特定できないものは含まれず、総合的に判断し年号がおおよそ類推されるものは判読されたものとしてこれに含んだ。紀年銘資料には、死去、洗骨、合葬年及び造墓年、あるいは死去年か洗骨年かはっきりとしない不明のものも含まれる。

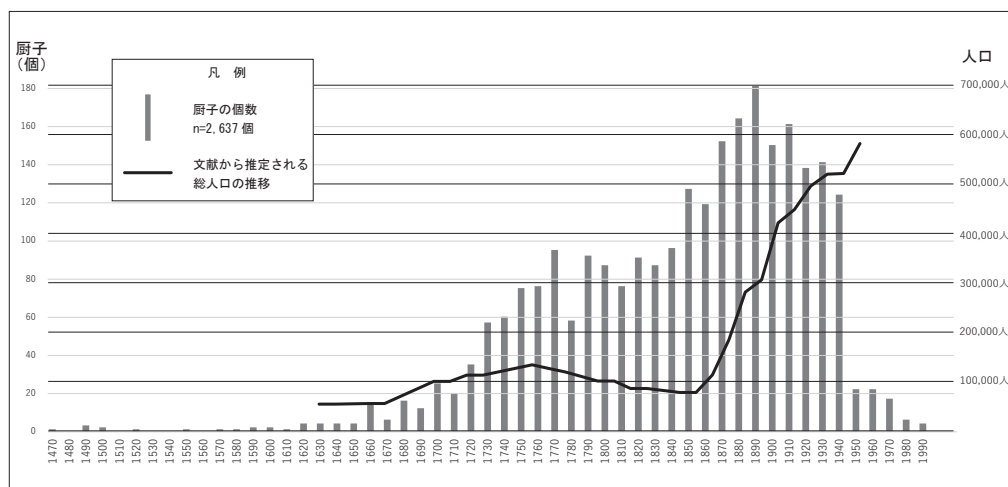


図2 紀年銘厨子(個数)の推移と歴史文書からみた琉球の総人口の推移(10年単位)

年ごとの紀年銘厨子の個数の算出は、厨子1基に複数記されているものは最古年を基準年として、個数の推移を確認する(図2)。このグラフの課題として、死去年だけではなく、洗骨、合葬などの記載年代を1基1点として算出されたものであるという点がある。この方法は安里の方法とほぼ同様である。しかし、厨子の被葬者は1人ではないこともあり複数の記載がある場合もあることも注意が必要である。

いくつかの課題もあるが、本グラフから分かるのは1700年以前の資料数が極端に少なくなっていることがわかる。一方、現代の数も減じている。これらは次のように解釈した。1700年頃までは厨子に紀年を記すことが少なかったために生じた。現代の方が減じているのは本資料の基データが主に遺跡調査報告書であるため、埋蔵文化財保護行政の対象とならなかったために減じたものと推定した。なお、これに史料から確認される総人口の推移を重ねたが、厨子個数の経年変化は18世紀中頃で増加からやや減少あるいは停滞し、19世紀中頃から増加に転じる様子が観察されておりタイムラグがなくおよそ相関するようにも見える。

死者数の件数の推移は、ある程度資料数が認められる期間を1730～1925年とし、この期間の死去年・洗骨年を件数(1基の厨子に複数名記載される場合もあるため、1基ではなく、1件とした)を抽出した(附表)。

死去年が記載される件数(以下、死去件数)は対象とした1730～1925年では610件、洗骨年記載件数は1,492件、合葬移葬は107件、不明は624件あった。なお、死去年および洗骨年のいずれの記載もある事例は336件あった。実際の死者数の推移を示しているのは死去件数である。洗骨年は通常死後1、3、5、7年でを行うとされているため積み上げ棒グラフでは正確ではないと考え、両者を折れ線グラフで示した(図3)。

近世を対象とする本論だが近代統計と比較を通して結果の考察を行うため、対象年代を近代

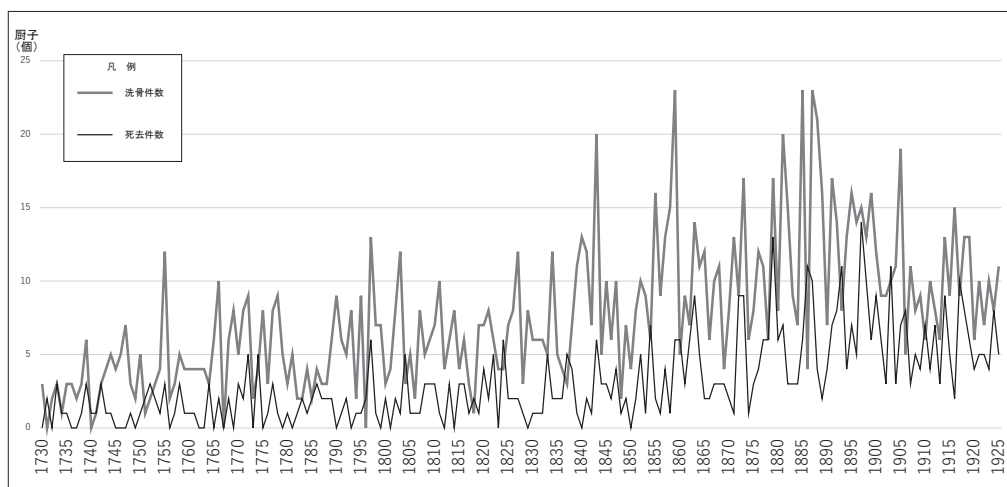


図3 死去・洗骨件数(1年単位)

まで含み検討する。これは、方法論や今後の課題を洗い出すために次のことを企画した。死者数件数の変化をグラフ化し、これに近代統計で確認できる死者数推移と比較検討すること。本作業は導き出された死者数推移の正確性について議論を行うためにも必要と考えた。

3. 厨子記載死去年と近代統計資料の比較

言うまでも無く死去件数を総人口に置き換えることはできない。なんらかの関連性を見出すことはできるかもしれないが、あくまでもここで論じるのは死者数の推移についてである。その推移を、本論では死亡クライシスという概念を用い、平常年よりも相対的に死者数が多い年をあぶりだすことを試みたい。

最初に近代の統計との比較を試みた。図4は近代統計の死者数の推移である。本論では『名護市史資料編1 近代歴史統計資料集』（名護市史編さん委員会1981：64）のデータを用いた。双方のデータはおおよそ山と谷の推移がおおよそ一致する1890～1889年、1904～1907年、1913～1919年の21年分と、不整合で一方が山の時には一方が谷になる傾向を示すところが9年分に分けられると考えた。近代をとおして見ると約70%が整合的になっている。無論ある年の死者数を死去件数2件や3件のデータでカバーできているかと言えば、データの少なさは否めない。具体的に、1894年の統計上の死者数は8,295人だが、厨子の銘書データが得られた死去件数は11件で、約0.13%となっている。サンプル数を増やすことが重要と考えられる。統計学的には、実際に収集された調査結果と真実との間にある差を誤差という。誤差は、理想的な状況でも偶然におこるものと、データの収集方法が適切でないため系統的におこる一定の方向性をもつものに分けられ、前者を偶然誤差、後者を系統誤差という。

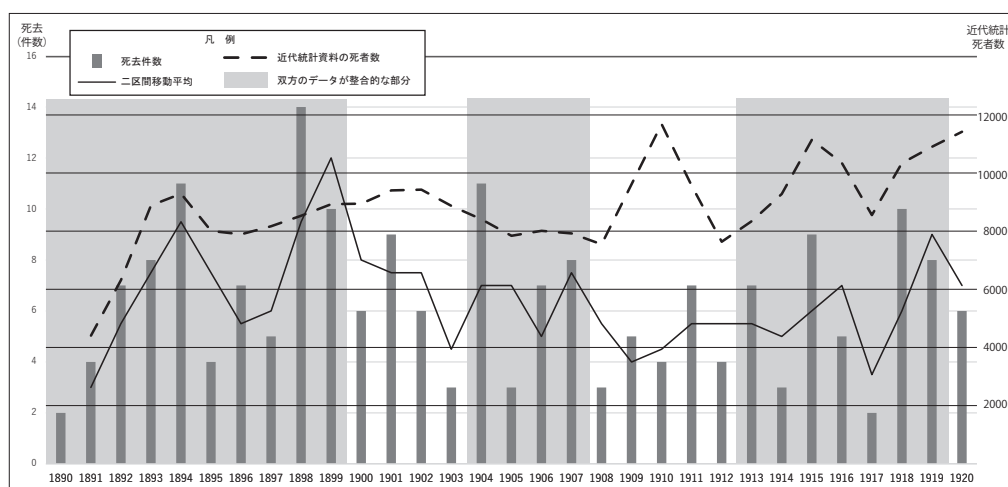


図4 死去年件数と近代統計資料の死者数記録

本資料のサンプルは厨子である。このため、例えば身分の違いや時代の傾向によって銘書として死去年を記すか記さないかが異なれば、系統誤差が生じる可能性が高い。ある時代までは洗骨年しか記載しなかったものが、ある時代以降死去年を記すようになったなどによって生じる死去件数の増である。

いずれにしても、このような分析における必要なサンプルの質と数の問題は指摘されるが、7割で一定の相関があるように見られるのは近世の厨子を用いた死去件数からみる検討でも有効と思われる。

4. 厨子記載死去年から考える死亡クライシス年

死亡クライシスは平常な死亡者数からの異常な増加、あるいは平常年の死亡者数から著しい上昇が観察される局面を言う。この場合、死者数は銘書に死去年が記載された数。平常年（平均死亡者数）は、該当年を含む前後5年の平均死者数とする。また、死亡者指数を、平均死亡者数÷死者数で算出し、死亡者数が平時の死者数よりも高い率を示す異常死亡率を以下のように設定した^{註2}。

超高死亡者数＝死亡者指数2.0以上

高死亡者数＝死亡者指数1.5以上

中死亡者数＝死亡者指数1.2以上1.5未満

平常年＝死亡者指数1.2未満

先に近代の死者数推移と厨子の死去件数は約70%ほど整合することを紹介した。これに加えてある年の事例を引き合いに出しておきたい。本論の死去件数が最もピークとなっている年の一つに1879年がある。この年は死去件数13件があって、今回集成した事例の中でも二番目に件数が多い年で、死亡者指数は2.64となっている。1879年は琉球藩が沖縄県となった年である。この年の5月以降沖縄本島や宮古島ではコレラが猛威をふるったと記録されている（宮里2020）。

近代統計との整合と、高い死亡者指数を示す年代にコレラの流行があったことを根拠に厨子記載の死去年件数の推移が実際の死亡者数の増減をある程度反映している可能性があるかと仮定して、以下に近世の死去件数を見ていきたい。

付表に1年単位の死去件数をまとめた。件数の前後5年から平均死亡者数を算定した^{註3}。高死亡者以上の死亡者指数となる年は記号「●」でこれを示した。

近世は死者数の推移を立証する近代統計のようなデータが無いので、死亡クライシスとなるような文献記録の有無を比較として用いる。一般的に死亡クライシスは飢饉や災害によってもたらされると考えられている。琉球の飢饉、災害、疫病年の整理については、山田浩世（2018・私信）を用いた。

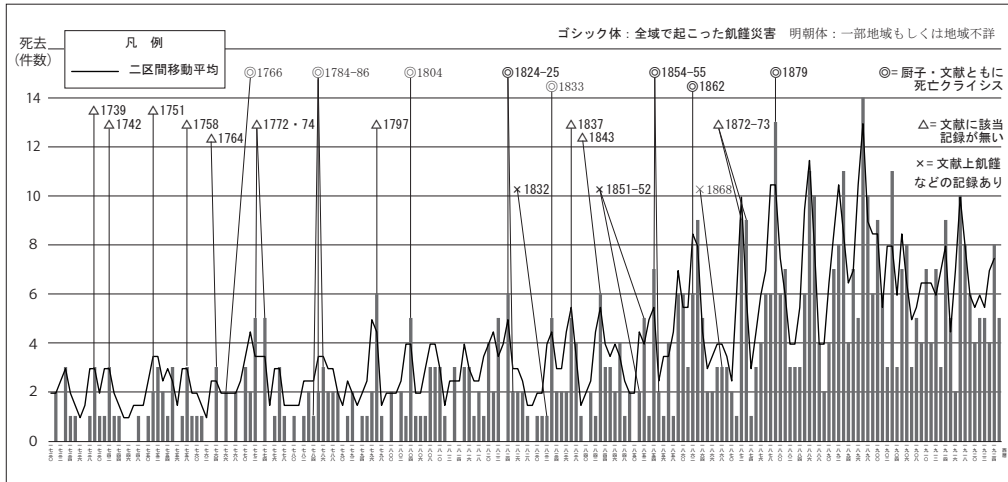


図5 1年単位の死去年件数（n=610件）と文献記載の飢饉等災害記録

比較した結果（図5、附表）、①文献では飢饉などの記載はあるが、厨子では死亡クライシスではない不整合が3件（図表では△で示した）。②厨子の死去件数から死亡クライシスに該当する年だが、文献に該当する記録がない不整合が10件（×）。③厨子・文献ともに死亡クライシス年に該当する整合するものが8件（◎）あった。文献で記録される11件の飢饉等のうち8件、おおよそ72%が整合的な結果となった。しかし、「×」で示した不整合の年、具体的には1739、1742、1751、1758、1764、1772・74、1797、1837、1843、1872～73年の10件は、死去件数からみると死亡クライシスにあたる年だが、文献からは該当する記録がみあたらない年となっている。その原因としてはやはりデータの少なさによる誤差が一つ考えられる。特に厨子の死去件数から死亡クライシス年に該当するのに対して、該当する文献が無いというのが1700年代にデータが偏っており、そもそも厨子の事例数が少ないために生じた可能性は否めない。

一方で、逆のことも考えられる。文献史料そのものに飢饉や災害を記録していない可能性である。これについては、別の角度からの検証も有用である。具体的には銘書に死亡年齢がある場合は死亡クライシスの年に若い人の死亡が多いなどの検証である^{註4}。しかし実際には厨子に年齢が記載されているのは全体でもおおよそ218件と少なく、この方法には課題が残る。例えば、1879年の銘書記載から13件のうち行年がわかる3件の平均年齢を算出すると39.33歳となっている。一方で、近代の事例も含む全ての行年から算出される平均年齢は38.04歳となっている。事例数が少ないことなどの理由によって、若い人の死亡が多いというような予想とは反する結果となった。この問題の解決として、今回は厨子記載例だけをとりあげているが、可能性として厨子に納骨された人骨の年齢調査や理化学的分析調査などとあわせて検討することも可能と考えられる。

5. 課題点

本論最大の課題は、銘書を記したのは基本的には士族であるという点が挙げられる。百姓も銘書を記すが、相対的に少ないとされる。那覇市の銘苅古墓群では50%ほどの厨子には銘書が書かれるのに対し、首里に近い浦添市では40~20%、さらに離れてうるま市に所在する古我地原古墓群だと12%、久米島のヤッチのガマの例では4%と、首里・那覇に近いところの士族層では文字をたくさん使い、地方に行くとその数は減じていく（古塚2007：91）。このため琉球全体の人口動態ではなく、士族の人口動態を示している可能性が高く、この場合そもそも士族は飢饉に強かったのではないかという疑問が残る。疫病は別としても、今回のように飢饉や災害を取り上げて比較することは比較対象として適切ではなかったとも考えられる。この点で本資料群と比較すべき対象は『家譜』を用いるべきという考え方^{註5}は一つ理にかなっているように思う。家譜に記載された内容をビックデータとして用いた人口動態との比較は今後の課題としておきたい。

おわりに

本小論は、葬墓制資料から歴史復元を目指す研究の一環として、琉球沖縄歴史学会2021年6月例会で鈴木悠とともに発表した（宮城・鈴木2021）。本論はこの例会の内容に当日、その後も多くの方より資料提供やご教示賜り、加筆修正した。本論が人口動態の研究において寄与するためには今後も資料を増やして検証するつもりではあるが、そもそも歴史人口学や統計学的知見に立つと不備も多いと思われる。この点は、忌憚のないご意見を賜りたい。

本論を執筆にあたり比嘉吉志氏、山田浩世氏には文献史学の立場より、近世琉球の人口研究に関する基礎的な情報をご提供いただきました。また、資料調査や分析にあたっては、鈴木悠氏にたびたび内容確認などをさせていただきまことことができました。感謝申し上げます。他にも多くの方から資料提供、ご助言賜りました。記して感謝申し上げます。

Alexandra Garrigue、安里進、安和吉則、石井龍太、市川智生、上原静、金城善、久貝典子、新里貴之、鈴木悠、豊見山和行、比嘉吉志、山崎真治、山田浩世、渡辺芳郎（五十音順敬称略）

なお、本研究は「葬墓制資料に基づく近世琉球社会史の学際的研究」（基盤研究B、課題番号21H00604、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部である。

《参考文献》

安里進2006『比嘉門中墓の家族史—家族の数だけ歴史がある—・比嘉門中墓の調査概要』浦添市教育委員会
安里進2021「絵図と厨子からみた首里・那覇の人口増大と都市化をめぐる問題点」『沖縄文化』沖縄文化協

会pp.15-59

- 安里進・ほか1997『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者-近世墓の考古学的調査による家族復元-』浦添市教育委員会
- 池本裕行・阿部英樹2018「和歌山藩領における天保クライシスの実態－沿岸部と内陸部の比較を中心として」『中京大学経済学論叢』29号 中京大学pp.1-30
- 上原静2003「グスク時代」『沖縄県史』各論編2（考古） pp.253-328
- コリン・レンフルー、ポール・バーン（著）、池田祐ほか（編）2007『考古学－理論・方法・実践』東洋書林
- 関根達人2018『墓石が語る江戸時代 大名・庶民の墓事情』吉川弘文館
- 関根達人・澁谷悠子2007「墓標からみた江戸時代の人口変動」『日本考古学』第24号 日本考古学協会 pp.21-39
- 高橋誠一2001「沖縄の格子状集落に関する予察的考察」『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論集』関西大学東西学術研究所pp.203-216
- 高宮広土1997「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したか」『南島考古』No.16 沖縄考古学会pp.27-46
- 高良倉吉2000「グスク論を検討するための若干の前提－村=シマの数およびその人口規模の推定－」『高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化（下巻）』同論集刊行会pp.303-310
- 友寄英一郎1971「先史沖縄の人口」『古代文化』第23巻第9・10号 古代学協会pp.221-236
- 名護市史資料編さん委員会1981『名護市史・資料編・1 近代歴史統計資料集』名護市役所
- 比嘉吉志2021「近世琉球における人口推移の地域性について」『島嶼地域科学』第2号 琉球大学島嶼地域科学研究所pp.19-39
- 古塚達朗2007「銘苅古墓群南B地区における銘書（ミガチ）」『銘苅古墓群－重要遺跡確認調査報告書－』那覇市文化財調査報告書第72集 那覇市教育委員会pp.80-91
- 宮城弘樹2022a「発掘された琉球墓」『葬墓制からみる近世琉球社会－祖先と子孫の対話－（報告集）』沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所pp.3-9
- 宮城弘樹2022b「墓制から紐解く近世琉球社会」『墓からみた近世社会 2』雄山閣pp.205-240
- 宮城弘樹・鈴木悠2022「厨子甕銘書からみた近世琉球の人口変動に関する予備的研究」『テーマ 考古学と文献からみる近世琉球の人口変動 琉球沖縄歴史学会6月定例会』（口頭発表）
- 宮里厚子2020「フランス語史料にみる1879年のコレラ罹患者の洗骨について」『琉球大学欧米文化論集』（64）琉球大学pp.1-13
- 山崎真治2021「人類史を読み解くキーワード 人口・寿命・遺伝子」『海とジュゴンと貝塚人－貝塚が語る9000年のくらし－』（令和3年度沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展）沖縄県立博物館・美術館pp.30-31
- 山田浩世2018「近世期琉球における自然災害と飢饉」『第8回 葬墓制からみた琉球史研究会』（口頭発表資料）

《脚注》

- 註1. 死去年、洗骨年以外にも造墓年などが記載されるものがある。その中で安里進は、人口推計の基準年として使用した年代は、1997・2006年の論文としている。当該論文はその主目的が厨子甕の編年研究を目的としたものである。この中で死去年と洗骨年ではより調達年に近い洗骨年の編年基準における優位性が説かれている（安里1997：6）。
- 註2. 死亡クライシスの設定には、池本ほか2018、関根ほか2007などを参考にした。
- 註3. 前後5年の平均を平常年の基準としたため、1730年からの対象としながらも平均死者数の少ない1729年以前の資料を用いることになるため、結果として1735年からの分析となっている。
- 註4. 2021年6月の琉球沖縄史学会例会の発表において、渡辺芳郎氏よりご指摘いただいた内容を反映させている。
- 註5. 家譜を用いた歴史人口学の例としては、渡口真佐夫（私家版）がある。また、2021年6月の琉球沖縄史学会例会の発表において、安里進氏、金城善氏、豊見山和行氏より、ご指摘いただいた。

付表 1730～1925年の1年単位の死去件数と異常死亡年

評価	年	死去件数	死者指数	異常死亡区分	イベント／近代統計(沖縄県)
	1730	0			
	1731	2			
	1732	0			
	1733	3			
	1734	1			
	1735	1	0.92		
	1736	0	0.00		
	1737	0	0.00		
	1738	1	0.73		
△	1739	3	2.54	●●	
	1740	1	0.92		
	1741	1	1.00		
△	1742	3	3.00	●●	
	1743	1	0.92		
	1744	1	1.00		
	1745	0	0.00		
	1746	0	0.00		
	1747	0	0.00		
	1748	1	1.00		
	1749	0	0.00		
	1750	1	0.85		
	1751	2	1.69	●●	
△	1752	3	2.36	●●	
	1753	2	1.29	▼	
	1754	1	0.65		
	1755	3	1.83	●	
	1756	0	0.00		
	1757	1	0.69		
△	1758	3	2.54	●●	
	1759	1	0.79		
	1760	1	0.85		
	1761	1	0.92		
	1762	0	0.00		
	1763	0	0.00		
△	1764	3	3.30	●●	
	1765	0	0.00		
◎	1766	2	1.69	●	○飢饉
×	1767	0	0.00		○飢饉
	1768	2	1.29	▼	
	1769	0	0.00		
	1770	3	1.74	●	
	1771	2	1.10		◇口津波
△	1772	5	2.62	●●	
	1773	0	0.00		
△	1774	5	2.75	●●	
	1775	0	0.00		
	1776	1	0.61		～79口疫病飢饉(3733)
	1777	3	1.94	●	
	1778	1	0.79		
	1779	0	0.00		
	1780	1	0.92		
	1781	0	0.00		
	1782	1	0.69		
	1783	2	1.47	▼	
×	1784	1	0.69		○飢饉
◎	1785	2	1.38	●●	○飢饉
◎	1786	3	2.06	●●	★飢饉
	1787	2	1.22	▼	
	1788	2	1.29	▼	
	1789	2	1.38	▼	
	1790	0	0.00		
	1791	1	0.69		
	1792	2	1.16		
	1793	0	0.00		
	1794	1	0.69		
	1795	1	0.69		
	1796	2	1.38	▼	
△	1797	6	3.88	●●	
	1798	1	0.69		
	1799	0	0.00		
	1800	2	1.05		
	1801	0	0.00		
	1802	2	1.00		～03口疫病(425)
	1803	1	0.65		
◎	1804	5	2.89	●●	○飢饉疫病
	1805	1	0.50		
	1806	1	0.52		
	1807	1	0.52		
	1808	3	1.50	●	
	1809	3	1.57	●	
	1810	3	0.67		
	1811	1	0.23		
	1812	0	0.00		
	1813	3	1.50	●	
	1814	0	0.00		
	1815	3	1.57	●	
	1816	3	1.65	●	
	1817	1	0.46		◇宮古死者多数
	1818	2	0.92		
	1819	1	0.41		
	1820	4	1.52	●	
	1821	2	0.79		
△	1822	5	2.04	●●	
	1823	0	0.00		
◎	1824	6	2.64	●●	★飢饉
×	1825	2	0.88		○飢饉(3358)
	1826	2	1.00		
	1827	2	1.05		
	1828	1	0.52		
	1829	0	0.00		
	1830	1	0.58		
	1831	1	0.58		
×	1832	1	0.50		★飢饉(3928)
◎	1833	5	2.29	●●	○飢饉
	1834	2	0.92		
	1835	2	0.92		□疫病麻疹(636)
	1836	2	0.88		
△	1837	5	2.52	●●	
	1838	4	1.47	▼	
	1839	1	0.39		○疫病痘瘡
	1840	0	0.00		
	1841	2	0.76		
	1842	1	0.35		
△	1843	6	2.44	●●	
	1844	3	1.32	▼	
	1845	3	1.38	▼	
	1846	2	0.85		
	1847	4	1.52	●	
	1848	1	0.38		
	1849	2	0.73		
	1850	0	0.00		
×	1851	2	0.81		～52★疫病(8224)
◎	1852	3	1.90	●	～口疫病(1843)
◎	1853	1	0.42		
◎	1854	7	2.48	●●	★
×	1855	2	0.63		★
	1856	1	0.29		
	1857	4	1.05		
	1858	1	0.24		
	1859	6	1.32		
	1860	6	1.47	▼	
	1861	3	0.73		
◎	1862	6	1.40	▼	★疫病麻疹
△	1863	9	2.15	●●	
	1864	5	1.15		
	1865	2	0.50		
	1866	2	0.56		
	1867	3	0.73		
×	1868	3	0.69		○疫病痘瘡
	1869	3	0.83		
	1870	2	0.58		
	1871	1	0.28		
△	1872	9	2.25	●●	
△	1873	9	2.11	●●	
	1874	1	0.19		
	1875	3	0.55		
	1876	4	0.68		
	1877	6	0.59		
	1878	6	1.08		
◎	1879	13	2.60	●●	★コレラ
	1880	6	1.10		
	1881	7	1.13		
	1882	3	0.45		
	1883	3	1.46	▼	
	1884	3	0.49		3,292
	1885	6	1.12		
	1886	11	2.02	●●	
	1887	10	1.80	●	
	1888	4	0.64		
	1889	2	0.31		
	1890	4	0.59		3,675
	1891	7	1.05		5,140
	1892	8	1.16		7,495
	1893	11	1.59	●	10,280
	1894	4	0.56		8,295
	1895	7	0.91		7,717
	1896	5	0.63		8,068
	1897	14	1.86	●	8,270
	1898	10	1.28	▼	8,793
	1899	6	0.85		9,065
	1900	9	1.22	▼	8,824
	1901	6	0.80		9,979
	1902	3	0.41		8,879
	1903	11	1.70	▼	8,863
	1904	3	0.51		7,953
	1905	7	1.17		11,634
	1906	8	1.44	▼	8,294
	1907	3	0.53		7,548
	1908	5	0.89		
	1909	4	0.73		
	1910	7	1.24	▼	11,686
	1911	4	0.77		7,436
	1912	7	1.31	▼	7,840
	1913	3	0.52		8,849
	1914	9	1.52	●	9,711
	1915	5	0.85		12,571
	1916	2	0.35		8,117
	1917	10	1.72	▼	8,987
	1918	8	1.44		11,634
	1919	6	1.00		10,115
	1920	4	0.71		12,725
	1921	5			
	1922	5			
	1923	4			
	1924	8			
	1925	5			